

## 1 闇から光へ

エフェソの信徒への手紙はパウロが、とくに異邦人のキリスト者にあてて書いた手紙です。このことはこれまでも折に触れて申し上げてきたことです。異邦人であること、すなわち、ユダヤ人でない、イスラエルの民に属していないということは、この民に与えられた救いの約束にあずかっていないということであり、したがって神と無関係、神を知らない、神から遠い、そういう存在だということです。

それがいまや神に近い者とされた、神を知り、神と関わりをもつ者となった、イスラエルに与えられた救いの約束にもあずかるものとされた、それが君たちだ、とパウロは語りかけたのです。

こうした大転換をもたらした方がほかならぬイエス・キリストである、これが、パウロによってくり返し証された福音です。彼の理屈はこうです。イエスがメシアとして、つまり救い主としてイスラエルにお生まれになったということは、はるか昔に神が、イスラエルの民に、何度も与えた救いの約束に神は忠実であられた、約束を反故にする、破ることをなさらなかった、御自分が言われたことに御自分が責任をもたれたということの意味しています。こうした神の真実に支えられて、あの約束は、いぜんとして効力を失っていないことがはっきりした。イスラエルの民は救われる。しかもあの昔の神の約束には、救いがすべての民に、ユダヤ人でない、イスラエルの民々だけではない、すべての民に及ぶとあった、イエスがキリストとして、メシアとして神の約束の確かさを実証したということは、その救いはすべての人に及ぶ、私どもすべてに及ぶ、このことも確かなこととなったということです。神の恵みが、神の憐れみが、イエス・キリストによって異邦人に及んで、君たちまで達しているとしたら、これは私どもは感謝し賛美する以外にはないのではないか、これがパウロのメッセージです。

このようにして神の救いが、イエス・キリストによって、異邦人であるエフェソの信徒にもたらされたことを、今日の箇所は、こう言っています。

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。  
光の子として歩みなさい（8節）。

この「あなたがた」がエフェソの異邦人キリスト者です。暗闇から光へ、この比喻は当時のエフェソの人々にとって、おそらく一般に分かりやすい言い方だったのだと思います。分かりやすいというより、その通りと相槌を打てる、打てば響く言い回しだったのでしょうか。

暗闇から光へということだと思います。2011年、震災の後、5月か6月、教団出版局主催のある座談会に出たことがあります。危機に聞く御言葉というテーマで説教を話題にした会です。新生釜石教会の柳谷牧師が、みんなが経験したこと

ただどと前置きして、何もなくなってみて、真っ暗な中で、星がきれいだった、「あの日、光があった」と思うんですよ、それはでかどまぶしい光ではないけれどやけに美しくと語っていたことを思い出します。説教に関連した話はあまりおぼえていないのですが、でかどまぶしい光ではないけれどやけに美しくというのが記憶に残っています（『説教黙想アレティア』特別増刊号）。

暗闇から光へ、それはエフェソの人々にとり実感をもつてうなづくことのできる言葉だったと思います。しかしこの光は、明るさそのもの、真昼の明るさというのでもないかも知れない。たとえばこうです。一人の旅人が、真夜中、暗い山道を辿っています。あたりはまだ真っ暗なのです。足下に気をつけて、一足一足、歩を進めていきます。少し見晴らしのよいところに出たとき、少し休んで、遠くを見やると、山の稜線はすでに明るくなりはじめているではありませんか。まだ夜です。夜中です。真夜中です。しかし暗闇が一番深くなるとき、われ知らず目をあげると朝の光がさしはじめているのです。この光はやがて明るい昼となる。しかしまだ一条の光にすぎないのです。光はそのようにして闇を破って射し込みます。大切なのは射し初めたこの光に照らされることです。

エフェソの人々は、暗闇から自力で脱出したのではありませんでした。∞節は、直訳すれば、こうです。「かつてあなたがたは暗闇であった、しかし今は主にあって光である」。光そのもの、明るさそのものの主イエスあって私どもも光なのです。私どもが自らを光源として明るく輝くというのではありません。キリスト・イエスに「照らされて」（Ⅱ節）はじめて光であるのです。暗闇にある私どもはくり返し照らされます。くり返し、少しの中止も、中断もなく、闇の中にある私どもに主は呼びかけてくださいます。目覚めよと呼びかけてくださいます。それが私どもをキリスト者にするのである。

## 2 闇との対決

真昼の明るさの中を歩むのでは必ずしもない、暗闇の中にあつて、暗闇のようなこの世にあつて、しかしキリスト者は世の光キリストに照らされて歩む、それを今申し上げたところです。

光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。・・・何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出さなさい（9-11）。

∞節から9節10節と読み進めていくと私どもが真昼の明るさの中を歩むのでないことが明らかになります。もし闇が完全に光となつていたら、どうしてなおそこに「実を結ばない暗闇の業」が存在するといわれるでしょうか。いや、そうした中を私どもは歩むのです。

闇の中で歩むということだと思ひ起すのは、ルネサンス期の大画家・版画家にデュ

「ラー」です。代表作の一つに「騎士と死と悪魔」と題された銅版画があります。死と悪魔とをあらわす魔物のあいだを馬に乗って進んでいく完全武装をした一人の馬上の騎士が描かれています。印象深いのは、まっすぐに前に向けられた彼の顔です。それは彼の落ち着いた内面を示しています。馬も馬の下の犬も主人同様まっすぐに走っていきます。この騎士は周りで騒ぎ立てているのを知らないではありません。今日の聖書箇所にあるように「実を結ばない暗闇の業に加わらない」のです。それがこの騎士の姿です。

しかし今日の箇所は私どもにそうしたことに関係しないように、加わらないようにと命じている、勧めているだけでありません。聖書は、「むしろ、それを明るみに出さなさい」と言っています。「明るみに出す」という言葉は、誤りを指摘せよ、あるいは反駁せよ、までの訳があります。少なくとも、それを素通りし、無関心を決め込むなどということは勧められていない。たんに消極的に暗闇の仲間にならないというだけではないことが言われているのは明らかです。

ただ誤解してならないのは、少なくとも私はそう思いますが、そうした暗闇の中でなされることと私どもが直接闘ったり、根絶したりしようとするのが求められているのではないことです。「明るみに出す」というのは、光にさらすことです。光にさらされてすべてのものは明らかになります。見えてきます。見えてきたとき、そこに暗闇はもうないということではないでしょうか。光が支配すれば、明るさの中で、闇は後退し、なくなるのです。

私どもはどこに立って闇の業を明るみに出せばよいのでしょうか。「光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じる」。この聖句は私どもにとってほしいへんありがたいものです。「光」というだけでは立場の取りようがないからです。むしろ善とは何か、何が正義か、どちらが正義か、ということが残ります。しかしそうしたことも含めて、主のみこころを問いなから、一つの具体的立場をとる可能性が私どもに与えられているということですが、またそうしなければならぬということです。こうして私どもはこの世にあって、光として、光の子として歩みつつけるのです。

### 3 すべての人を照らす「光」

さて光ということで、聖書にしたがいいくつかのことを申し上げてきました。あらためて注意しておきたいのは、イエス・キリストこそ「まことの光」であるということです。人はそれに照らされて光とされます。光の子として歩むように、生きるようにされます。

それを証しているヨハネによる福音書は、この光は「すべての人を照らす」（ヨハネ一・6）と証しています。「すべての人」です。キリスト者を照らす、キリスト者だけを照らすのではないのです。そうすると私どもが光とされる光の子として歩むように求められるということは、イエス・キリストというこの光をすべての人に伝えるということも含まれるということではないでしょうか。

この三月まで私は東北学院大学で仕事をしていました。今日午後この教会の牧師就

任式をしていただきます。学校からもう一度教会へ、大学の教壇から教会の講壇へと  
いうことになりました。しかし遣わされている先は違っても、同じだと私は認識して  
います。すべての人に光としてのキリストを伝えるというミッションにおいて同じだ  
ということですよ。

東北学院のことをここで言うのはふさわしくないのかも知れませんが、お許しいた  
だければ、大学のスクール・モットーは、命、光、そして愛を世のために、あるいは  
世界のために (Life, Light and Love for the World) というものでした。命、光、そして  
愛、それは一つ一つがすべてイエス・キリストを指します。この方を世界にというの  
です。この言葉はアメリカのミッション団体のモットーだったそうです。私はこのス  
クール・モットーがたいへん気に入っていました。とくに世のために、世界のために  
ということですよ。

教会は、あるいは私どもキリスト者は「地の塩」、「世の光」と言われます。その  
通りです。聖書に伝えられているように、イエスが山上の説教で語られた大切な、印  
象深い言葉です。しかし「地の塩」、「世の光」と、地や世にアクセントをおいて言  
われることはありません。

そこに強調点をおいて私は理解したいのです。なぜなら「まことの光」イエス・キ  
リストは「すべて人を照らす光」だからです。光の子として生きるということは私だ  
けが、私たちだけが光の子として生きればよいということでは、当然のことながらあ  
りません。私どもはキリストの光に照らされて、キリストが私どもに出会ってくださ  
って、キリスト者になります。このことがすべての人に開かれています。そのため  
仕えるのも光の子の大切な使命です。

イエス・キリストが私どもを照らすとき、キリストの言葉が私どもに響くとき、キ  
リストが私どもをとらえるとき、私どもの考え方が変わるだけではありません。私ど  
もの感じ方が変わるだけではありません、私どもの生き方が変わるのです。「わたし  
たちは、生きるすれば主のために生き、死ぬすれば主のために死ぬのです」(ロ  
ーマ 14・8)。私どもの人生の方向が変わるのです。これを神の側から言い直せば、  
私どもと出会い、照らしたもう神は、私どもの理性や感情だけでなく、私どもの意志  
も、したがって私どもの行いも、つまり私どもの全体を要求したもう。神を証しする  
人として、神を自分の人生を通して指し示す人となることを要求し、私どもを召し出  
すのです。

ルターは私どもを神の器と申しました。カルヴァンは神の道具と申しました。私た  
ちは私たちの古い生き方を捨てて、新しい生き方の道に足を踏み入れ、光の子として  
歩むことを求められます。パウロ自身がダマスコ途上で、天からの強い光に照らし出  
され、キリスト教徒の迫害者という生き方から決別し、福音の伝道者という神の備え  
たもう新しい道へと進んでいったように。私どもも光に照らされ、光の子として、そ  
れぞれの遣わされたところで、それぞれのその召しにしたがって、歩んで行きたいと  
祈り願っています。

(2018年7月22日)